

日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木県支部会報 2022.09.30

NO.37

- 理事長より「日本学校教育相談学会第34回総会・研究大会（栃木大会）総括」
- 令和4年度栃木県支部総会報告
- カウンセリング特別講座「不登校児童生徒のアウトリーチの実際～家庭、学校、関係機関の連携を目指して～」
講師：開善塾教育相談研究所 所長 藤崎育子 氏
- 特集「日本学校教育相談学会第34回総会・研究大会（栃木大会）レポート」
- 栃木県支部事務局からのお知らせ

○ 理事長より「日本学校教育相談学会第34回総会・研究大会（栃木大会）総括」 柴 一彌 ～コロナ禍、異常気象、戦争に揺らぐ世界の中で～

第23回夏季ワークショップ、第34回日本学校教育相談学会総会・研究大会（栃木大会）は8月6日（土）～7日（日）にオンラインで開催されました。

ワークショップ、総会・研究大会には共に200名を超える全国の学会員の参加があり、栃木県からは50余名の参加を得ました。この数字に実行委員会はほっとしているところです。また、実践研究発表は17本、自主シンポジウム企画は6本出揃い、その内県内会員からは実践研究発表が7本、自主シンポジウム企画は2本です。栃木県の底力が数字に表れました。この結果からも本学会は会員の皆様の教育相談活動のひとつの拠り所として頼りになる存在であるということが分かります。第7波にまで及んだコロナの流行の最中、そしてロシアによる核の脅威をちらつかせながらのウクライナへの軍事侵攻という想定しえなかった事態の中で大会は実施されました。

また、その勢いが止まらない異常気象は地球のあちこちで観測され「命を守る行動をしてください」の呼びかけが何度も聞こえてきます。

春日井会長は総会時の挨拶の中で「今までとは違った子供たちを取り巻く教育と生活環境の中でますます寄り添うことの大切さ、研究と実践を大切にしてきた本学会の存在意義が試されている」と訴えています。

ワークショップ、実践研究発表、自主シンポジウムにはコロナ禍に関連する内容が昨年よりも増えました。昨年の兵庫大会のメインテーマにある「気づき、つながり、支え合う…様々な困難を乗り越え」は今年の「災禍に向かい支え合い、つないできた教育相談活動を子供の心の砦として…」のメインテーマにバトンタッチされました。

子供たちへの私たちの寄り添い方のヒントを宇都宮光琳寺井上広法住職が「息抜く力は、生き抜く力」で説き明かしてくれました。

さて、来年度の新潟大会の成功を祈るためにも引き継がねばならない課題も少なからずあります。

①オンライン開催の利便性、簡便性をメリットにするならば「参加費」設定は控えめに設定する必要があり、学生は学会員で有る無しの線引きは必要ないのではないか。

②ホームページのリアルタイム化

③発表者には受付から発表までの段取り、見通しが分かるようなインフォメーションが受付時に提示できることが必要

④実践研究発表内容の査読を適切に行うこと。

このような課題を乗り越え、ここで学んだ知恵を行動に起こし、来年度の新潟大会ではその成果を共に讃え、学び合いましょう。

○ 令和4年度栃木県支部総会報告

令和4年6月4日、教育会館大ホールにて、令和4年度の支部総会が開催されました。

佐藤理事の議事進行により、令和3年度事業報告・決算報告、令和4年度の事業計画・予算案などが滞りなく可決されました。詳細は、支部からの送付物の関係資料をご確認ください。

今年度は役員改選の年となりますが、大半が留任で学会の栃木大会に向かっていくことになりました。長年事務局を務められた高松千恵子さんだけが退任となり、吉川修司さんが後任となりましたので、よろしくお祈りします。高松さん、長い間、大変お疲れ様でした。

(文責 松本直美)



○ カウンセリング特別講座

「不登校児童生徒のアウトリーチの実際～家庭、学校、関係機関の連携を目指して～」 講師：開善塾教育相談研究所 所長 藤崎育子 氏

今年の学校教育相談学会栃木支部総会後のカウンセリング特別講座では、開善塾教育相談研究所所長の藤崎育子先生のご講演を拝聴しました。

藤崎先生のご講演には、支部の研修会などで今までに数回参加して参りましたが、その度に、受講している私が元気になる、「教育相談に関係して良かった、また頑張ろう」と決意を新たにしているのを覚えています。今回のご講演も、期待に違わず、先生の貴重なご経験に裏打ちされた、具体的で、聴く者を勇気付けてくれるものでした。

不登校児童生徒との関係作りの大切さ、児童生徒本人だけでなく、保護者とも良好な関係をつくる工夫、そのためには、子どもの生育歴と子どもを取り巻く環境への理解が不可欠なことを、実践事例をもとに、丁寧に教えていただきました。

その中で、不登校の児童生徒の保護者との対応の中で、ついつい言ってしまいそうな「長い目で見てみましょう」という台詞は、問題の先送りでもあるというご指摘は、本当にはっとさせられました。

藤崎先生のお話しには、随所に、「相談と連携は、(実際は) 人と人」「(だから) 相手をとことん理解する」「(そのためにも) 相手に恥をかかせない・相手の顔をつぶさない・(頭ごなしに) 叱らない・いい所を発見する(くらべず、決めつけず、あきらめず)」というお考えがちりばめられ、それが「幸せでない子をどうにかして助けていこう」という熱い想いから生まれているのが感じられました。それらは、先生のお人柄からにじみ出るものでもあり、教育相談に関わる者として、自分のあり方をもう一度見直してみようと思うきっかけにもなりました。

ご講演終了時には、今関係している生徒たちに、「次はこうしてみよう、ああしてみよう」と思いをめぐらしている自分がいました。藤崎先生の今後の益々のご活躍をお祈りし、講演会の報告といたします。

(文責：原沢大生未)

○ 特集「日本学校教育相談学会第34回総会・研究大会(栃木大会) レポート」 栃木大会夏季ワークショップ(8月6日)

令和4年度の夏季ワークショップには、約220名の参加がありました。コロナ禍や個に応じた学びなど最新の課題に、不登校支援や心を育てるグループワークなど長年必要とされているテーマが織り交ぜられ、全6コースの講座が展開されました。

すべて学会研修委員会の企画で、運営担当も研修委員ですが、栃木県の運営会場からも2名ずつ補助員がつき、オンラインによる運営のお手伝いをしました。講座や講師の特色に応じて、講話、ワーク、ブレイクアウトルーム(少人数に分かれて)での話し合いなど、オンラインなりの工夫された学びや学び合いが展開され、熱い研修となりました。

こうした学会研修委員会主催の研修は、もう一つ次回年明け1月8日(日)の中央研修があります。今回もオンライン開催が決定していて、東京(通常代々木のオリンピック青少年総合センター)まで行かなくても自宅等から参加できます。午前中は改定が迫る「生徒指導提要」の改訂と活用のポイントについてのパネルディスカッション、午後

は4コースの講座（詳しい内容は、10月の研修会案内やホームページに掲載）です。

（文責：松本直美）

Aコース 「学校の異文化体験から『声にならない声』を聴く」 講師：結城 恵（群馬大学）

もしも自分が転校生として、言葉も文化もわからない学校の教室に入ったら？本ワークショップは、「ええぞ、カルロス」という動画（外国語音声）を視聴して異文化体験を疑似体験し、参加者が感じ取ったこと・捉えたことを共有し合うワークから始まりました。次に、参加者の感想・気づきから、講師の結城先生が、4つのポイント（①しんどさ②おしっこ事件③感情の共有④言語・非言語）を示され、視点ごとに議論を深めました。そして、もう一度「ええぞ、カルロス」の動画（外国語音声→日本語音声）を視聴し、内容を理解した上で、改めて感想・気づきを共有していました。

様々な立場の参加者や、群馬で異文化共生に取り組まれている結城先生のチームの方々との活発な意見交換が行われ、異文化に接している人たちの「声にならない声」に思いを寄せ、日本の学校のこれからの在り方や対応について、深く学ぶことができました。

（文責：高橋修一）

Bコース 「今、求められる学習指導 ～個に応じた学びの保障～」

講師：篠ヶ谷圭太先生（日本大学）

テーマにもとづく4つの内容の講話でした。1つめは、「個に応じた指導の重要性」について、個人差の捉え方や対応の仕方の大切さのお話でした。2つめは、「個人差の分類」として、学習に関する個人差を①性格②能力③動機付け④信念の4つの側面に注目されてのお話でした。3つめは、「教育効果への影響」について「適正処遇相互作用」をもとに、知能関連・動機付け関連・信念関連の側面からのお話でした。4つめは、「個人差への対処」について、個人差を減らす働きかけや処理プロセスに即した支援について、事例を示し個人差にあったアプローチの方法のお話でした。

途中、3回のブレイクアウトを取り入れ、4名程度のグループに分かれ先生方と話し合いました。

（文責：金久保貴子）

Cコース 「コロナ禍を機に児童精神科医療現場や巡回相談から見てきたもの」

講師：新井 慎一（尾山台すくすくクリニック）

講師の新井先生は、児童精神科医のお立場や、学校での巡回相談のご経験をもとにご講話くださり、約60名が参加しました。

最初にコロナ禍が及ぼした、社会全体や子ども、親それぞれへの影響が提示され、その後、クリニックでの診療や学校での巡回相談の6ケースについて、保護者や教師へのアドバイスの仕方を具体的に示されました。「強迫」「甘え」「親子関係」「不安」「学習」「教師への反抗」など、教育全般にわたる相談事例に対して、医療面からはもちろん、特別支援教育や社会福祉、学校の巡回相談での観察やご自身の子育て経験、またアドラーの理論やライフスタイルの意味などを用い、様々な観点からのご意見をいただきました。アドバイスの正解は必ずしも一つではありませんでしたが、それは、「現場は常にオーダーメイド対応が必要」という先生のご示唆と受け取ることが出来ました。

（文責：小玉葉子）

Dコース 「これからの不登校支援 ～コロナ禍、GIGAスクールを越えて～」

講師：伊藤亜矢子（聖学院大学）

コロナ禍の不登校の背景には、①家庭（大人の生活の変化は家庭の不安定をもたらす）②学校（マスク生活が長引き、友達と思い切り関わるのが難しい）③社会（先の見えない感染状況が「孤立・絶望」を背景とした「自暴自棄」的な事件等これまでの矛盾や課題を急激に露呈させている）という3つの土台の揺れがある。このようなコロナ禍の不登校支援は、学びたいと思った時学べる場が保障されるよう、人生の長いスパンの中で今できる支援をすることだ。子どもが来ていなくても学校ができること、すべきことを考えることだ。

子どもにとっての学校とは、生活の場・成長の場・友達に会える場・行かなくてはいけない場だ。しかし、だからこそ行けない時がある。私たちは、子どもにとってハードルになっているものは何なのか、「環境・きっかけ・個人の課題」の視点からその子のストーリーを理解する必要がある。そして、そのハードルを跳び越えたり、すり抜けたりする忍法（戦略）を一緒に考えていく。教師は「教えることから子どもを理解することにシフトし、常に温かな期待をすることが、リスクから子どもを一生守ることになる。」ということのを忘れてはならない。参加者の質問にも丁寧に答えてくださり、多くのことを学ぶことができた研修だった。

(文責：望月 都)

Eコース 「心を育てるグループワーク –楽しむことから始めよう–」

講師：正保春彦（茨城大学）

学校現場で起こるさまざまな問題点の共通項には「心と人間関係」の問題があり、グループワークは子どもたちのもっている潜在的エネルギーを有用なエネルギーに変換するツールです。その3大要素は、「かかわる」「理解する」「表現する」ことです。かかわることの相互作用は、 $x=2^n-n-1$ で表され、10人でも1,013通り、40人の学級では膨大な数の関係が存在します。その中で心の基礎体力を向上させ他者との対人関係に生かしていくことが重要で、代表的なグループアプローチの技法等のほか『インプロ』（impro, 即興）を中心にお話をいただきました。『インプロ』とは、Yes andを基本原則とし、その場の状況や相手のオファーに柔軟に対応し仲間と共通のストーリーを作っていく活動で、自己解放・一体感・柔軟性・自己肯定といった心理的効果があります。心を育てるためにすべての生徒を対象に「信じる」「楽しくする」「開く」の3つのマインドを取り入れた活動を、年間授業の1/100(=10時間)実施することで学校は変わっていきます。

(文責：布川裕美)

Fコース 「研究デザイン及びリサーチクエスションの検討—論文作成の基礎的ルールと基本構成—」

講師：中村 豊（東京理科大学）

スタッフ紹介、講師中村先生からの自己紹介後、まず論文筆耕のポイントが紹介・説明された。初めは学会誌掲載の形式に倣うとよい、目次は論文の設計図、基本文献の確認、完成までのロードマップを描くことが大切、など。続いて職域を基にブレイクアウトルームに分かれ、論文筆耕の経験等意見交換が為された。筆耕経験が無いグループもあったが、論文を読んだ経験から話し合われていた。もとの集団に戻りシェアリングとフィードバックがされたのち、ふり返りとまとめ。論文筆耕には方法論が必要かつ重要。法令の遵守。客観性=説得力[増]。図書館活用法のヒント。総じて具体的・現実的であり、参加者から「非常にクールで分かりやすく、やってみようという気持ちになった。」というコメントもあった。時間通りに終了し、質疑応答。本部研修委員の工藤先生よりまとめのご挨拶と事後アンケートのアナウンスをもって、無事終了となった。

(文責：井野維子)

栃木大会総会・研究大会（8月7日ほか）

文部科学省講演 「コロナ禍における不登校の対応」

文部科学省初等中等教育局児童生徒課長 清重隆信 様

私は高等学校の養護教諭として勤務しているが、これまで不登校生徒等と関わってきた中で、「どうしてこの生徒はこの状態にあるのだろうか」と理由・要因がはっきりせず、どう支援したらよいかわからずに悩んでいた。そのため、「コロナ禍における不登校への対応について」というテーマは興味深かった。講演で「最初に学校に行きづらいつ感じ始めたきっかけについて、子どもと学校の捉え方に差があること、特定のきっかけに偏らず、そのきっかけは多岐にわたることを改めて学び、前述した「どうしてこの生徒はこの状態にあるのだろうか」ということについて、理由・要因を一つに、はっきりとシンプルに捉えようとする姿勢の危うさに気がついた。子どもの背景を理解しようと最大限に努めることは大切だが、自身の理解にずれがある可能性が十分あること、子どもの心は複雑でさまざまな感情があることを念頭に置いて、子どもとかかわっていく必要があると考えた。

また、関係機関やSC・SSW等との連携について学んだが、高等学校では欠課時数がカウントされ、あつという間に留年か進路変更を余儀なくされる時期が来てしまう印象がある。各校の別室登校規定にも期間が規定されている、欠課時数がオーバーするまでの期間は、子どもも保護者も悩んでおり、学校は双方の願いを十分把握できず、選択肢を提示しながら願いを待つことになる。双方の願いが「進級・卒業したい」と確認でき、校内支援体制を構築しても登校できないことも多いものである。子どもの願いと現実は一致しないことも多く、子どもの願いは揺らぐ。そして、時間が過ぎて連携が遅れてしまうのが課題であると日々痛感している。そのため、講演の「子どもたちが社会的にどう自立していくかが重要」、「アウトリーチ型支援が必要」という言葉に非常に考えさせられた。本当にその通りであると感じると同時に、そのために支援者はどうしたらよいものかと考えさせられる。今後、もっと経験を積み、支援体制の構築・連携について学んでいきたいと強く思った。

(文責：手塚愛梨)

記念講演 「息抜く力は、生き抜く力」

浄土宗光琳寺住職 井上広法 様

記念講演は清映山松寿院光琳寺の井上広法住職が光琳寺よりライブ配信された。住職は大学で心理学を教えながら

僧侶が社会に貢献できる役割づくりに取り組んでいる。『息抜く力は生き抜く力』というテーマで、行き詰まった世の中で息を抜く事を、心理学と仏教との考えを交えて講演された。

瞑想や座禅など仏教の中にあつた心の在り方が、医療や心理臨床の分野に応用され、現在ではマインドフルネスが認知行動療法のベースとなっている。「我々もマインドフルネスで得られる心の状態を日常生活で大切にしたい」と話された。次に幸せな人の共通点は優しい人であることとし、『優しさ』をミラーニューロン、オキシトシン、扁桃体の働きから科学的に解説した。また、日本では自分を犠牲にして他人を救うという考え方が多いが、『自利利他』、先ず自らにメリットを施し、そこから他人へ利益を提供しなさい」と話された。最後に今の社会では自分自身に愛情を注ぐ事が忘れられている。「自分への優しさが大切なテーマである」と講演会を締めくくった。教育相談に携わる者として自覚しておかねばならない講演の内容であった。

(文責：藤浪直紀)

小泉英二記念賞受賞者講演 「学校教育相談との出会いと学び、そして日々の実践」 中島 崇 (新潟県支部)

小泉英二記念賞受賞者講演会がオンデマンドで放映されました。小泉英二記念賞は小泉先生の功績を検証するためにできたもので、学会の発展と充実を担う若い世代の会員の育成と実践を奨励する目的のために設けられたものです。この度の「第14回小泉英二記念賞」は、新潟県支部事務局中島崇先生が受賞されました。

中島先生は教師になられて間もなく本会に入会され、今日まで多岐にわたって実践研究や研究発表に取り組んでこられました。これからの若手のリーダーとして活躍が大いに期待される先生です。先生からは『学校教育相談との出会いと学び、そして日々の実践』と題してご講演がありました。先生は群馬県出身で大学卒業後、白根改善学校、上越市立教育相談センターを経て、新潟県の小学校の教諭となるまでの思いを込めたお話がありました。この間、多様な子どもたちと出会い、多くの研修などに参加し、話を聴く大切さを知ることを通して、自らの教師像を描いてきたそうです。20年前には「子ども一人一人が認め合い、信頼し合える学級づくりを目指して～特別な配慮が必要な子供へのかかわり方や支援の工夫を中心として～」と題した実践報告をして、構成的グループ・エンカウンターやアサーショントレーニングを用いた子どものかかわり方と支援の工夫についての事例を発表しています。その後は、学びの場を求めてSGEを学ぶ会の立ち上げや図書の執筆、ピア・サポートなどにも取り組んでこられました。ピアサポートプログラムでは、子どもたちの「こころのファイル」を通して自己理解・自己肯定感の高まりを実践のプログラムに取り組んできたお話があり、参考になりました。今後さらに、活躍が期待される先生です。

(文責：馬場友治)

学会賞受賞者講演 「学校教育相談の地域への展開 ～温かい眼差しの輪の構築のために～」 田邊昭雄 (東京情報大学 千葉県支部理事長)

今回学会賞を受賞した田邊先生は、これまで学校教育相談で培った知見を、学校内に止まらず、広く地域・社会に還元していくことを推奨しています。田邊先生自身、学校教育相談を生かし、いのちの電話や傾聴ボランティアやゲートキーパー養成講座など様々な取り組みに携わってきました。「学会の発展のために、若い学会員を増やしていくとともに、可能であればベテランも辞めずに長く継続して地域・社会で実践していくことが有効。」と述べられました。

「スリランカの悪魔祓い」(上田紀行著)を例に出し、「悪魔は孤独な人にやってくる。温かなまなざしの輪の中にいけば、悪魔はつかないし祓うことができる。地域社会には、そのような温かなまなざしの輪が必要で、そのためにも学校教育相談の実践が大きく生きてくる。」と話されました。「学校教育相談を温かい大きな広がりができる活動にして、安全・安心・信頼・平和な学校及び地域社会づくりに、学会活動を通して生涯にわたって貢献していきましょう。」と強調しておりました。

(文責：伊澤 裕)

研究・実践事例発表及び自主シンポジウムの概要報告

大会は、大過なく無事終了して安堵しているところです。しかし、振り返ってみると、そうでもありませんでした。発表申し込みが最初の締め切り時が13件で、一時どうなることかと思いました。本部及び全国支部長さん、及び栃木支部の会員さんのご協力で、最終的に研究発表17件、自主シンポジウム6件、計23件の申し込みになりました。

研究発表の内容ですが、バラエティに富んでいて傾向はありませんでした。ただ参加人数が多かった研究発表は、自閉症児への支援、学級集団づくり、授業を通して行う教育相談、教育相談コーディネーターと日々の実践活動に直結した研究発表に興味関心があったと思われます。自主シンポジウムで特筆されるのは、大野精一先生の追悼シンポジウムです。若い人にはご存知の方は少ないと思われます。先生は、本学会の研修委員を長らく務めていらいました。ご冥福を、お祈り申し上げます。

(文責：小川正人)

栃木大会（研究・実践事例発表及び自主シンポジウム）に参加して

8月に実施された全国学校教育相談学会栃木大会に参加しました。今回の大会は全てズームで実施され、私は実践発表をしました。以前も研究大会に参加し実践発表を行った経験がありましたが、Zoomでの大会参加は初めてで、参加する事や発表の仕方など当初は戸惑いました。大会当日には係もあり、実践発表は「前撮り」の形で行いました。

私の実践発表は、専門学校でカウンセラーとしての働きをしていて、様々な学生に出会い、様々な形で関わった事をまとめました。40年近く執務した養護教諭時代にも児童生徒へ関わってきた事を実践発表してきましたが、発表に向けてまとめていく事で、自分を俯瞰してみる事ができました。目の前の児童生徒の事で日々過ぎて行く毎日を、自分自身で見直す良い機会でした。

これから活躍される若い方々が相談学会の研修や発表を通してさらに活躍されるよう期待しています。

（文責：池田清恵）

当日はあっという間にやってきた。発表することを決めたものの、初めての大舞台での発表は先が見えずわからないことばかり。さらにオンラインでの発表。参加者は画面オフ、マイクはミュート。人の気配が感じられない中、一人で話をするのは、最も苦手なことである。

「チーム学校の中で保健室の在り方を考える」と題し、「教職員と養護教諭の意識の差」と「養護教諭（保健室）の役割の多様性」を問題とし、「組織の一員として連携・協働できるチーム学校の中の養護教諭（保健室）の在り方」について考え実践したことをまとめた。そして、日々、様々な校務分掌を担いながら児童生徒の支援を行っている養護教諭の先生方を応援する内容にしたかった。しかし、7年にもわたるその内容は、ややもすると支援をしていた子どもへの対応話になってしまう。まとまらない内容を軌道修正し、筆の止まった私を励まし、後押ししてくださったのは、支部会の先生方である。発表はいくつもの課題を残したが、発表をとおして仲間とつながることの喜びや支えられることへの感謝、そして次なる挑戦を思い描けたことが私の成果である。

会員のみなさま、来年の新潟大会、ぜひ私たちとつながって発表してみませんか？

（文責：和田朋子）

今大会、2つの自主シンポジウム「グループカウンセリングを活用した学級の仲間づくり（2）（3）」と、2つの実践事例発表「教師による自己プランニング・プログラムの実践」、「学級担任によるグループカウンセリングの実践」で参加しました。

表題シンポの指定討論・企画と事例発表者の立場からの報告です。本稿でお伝えしたいことは、その内容でなく、メンバーと大会発表に至るまでの過程です。

シンポジウムの（1）は前々回の宮城大会でした。今回はそれに続く（2）、（3）を企画しました。（3）までの参加者名を改めて紹介します。松本直美氏 高橋修一氏 木村晴美氏 小谷野早苗氏 青木眞琴氏 金久保貴子氏 望月都氏 中野静子氏 池田清恵氏 中村恵子氏 森田裕子氏。管理職、学級担任、養護教諭、特別支援教育コーディネーター・・・県内の会員に加え、県外の研究者もいます。

加えて、事例発表「チーム学校の中で保健室の在り方を考える」の和田朋子氏、「学級担任によるグループカウンセリングの実践」「教師による自己プランニングの実践」の伊澤孝です。

このメンバーは、大半が学会員ですが、同じ私的な学習サークル（学校教育相談・学校カウンセリング）に登録している仲間です。機会を設けて学び合い、励まし合っている者達です。

発表に至るまで、サークル事務局の松本氏（支部理事）の段取りのもと、数回のZoomによるミーティングを重ねてきました。「こんな実践でいいの？」「それは、・・・がすごいよ。」「そこは、・・・してみたなら」と、グループスーパービジョンのように話し合いがなされました。

会報をお借りしてのお誘いです。会員の先生方が、個々すばらしい実践をして、「どこかで報告したいな」と感じて、いきなりの「大会発表」等はためらうことと思います。よかったら、一緒に検討し合い、サポートを受けながら発表等の準備を進めませんか。例えば、本シンポジウムは（1）～（3）まで「対人関係ゲーム」を主にしていますが、それに限らず、ソーシャルスキル・トレーニングや構成的グループ・エンカウンターなどグループアプローチを実践している。またはQ-Uなどアセスメントを活かした学級経営を実践している、不適応や不登校の個別援助に取り組んでいる等々大歓迎です。

上記の発表について、全国から問い合わせもあり、お誘いもしています。

ちなみに、顧問は前日本カウンセリング学会理事長の田上不二夫先生、入会費や年会費はありません。

（文責：伊澤 孝）

日本学校教育相談学会
第三十四回総会・研究大会
栃木大会
期 日 令和四年八月六日(土)・七日(日)
会 場 栃木県教育会館 (本部)
実施方法 ZOOMによるオンライン



○栃木県支部事務局からのお知らせ

年度後半の事業計画についてお知らせします。多くの会員の皆様のご参加をお願いします。特に、支部研究発表会では日頃の実践や研究を发表していただける方を募集しております。この機会に自分の実践や研究について意見を交換したり、アドバイスをもらったりして客観性を高めてみてはどうでしょうか。将来の論文発表にもつながります。また、教育相談カフェでは馬場先生による職業検査用紙を用いた体験活動を含む面接相談ということで、普段見聞きすることとはちょっと違った視点から面接相談を考えてみるということで、新たな視点が得られるのではないのでしょうか。

精神医学特別講座では、ネット・デジタル社会との共存ということをテーマとして講話をいただきます。健康、医療、食事や農業環境などに詳しい本間先生から幅広い視野で語っていただけます。ネット・デジタル社会とその影響について見識を広めてみてはいかがでしょうか。

冬期特別研修会は橋本屋様を講師に、子ども達のゲーム・SNSの世界をテーマに講話と、実際のSNSを体験する演習もあるそうです。ふるってご参加ください。

申し込み方法など

| 開催期日 | 事業名 | 会場 | 備考 |
|--------------------------------|--|--------------|--|
| 11月19日(土) 13:30~16:00 | 【第40回 支部研究発表会】 コメンテーター：伊澤 裕 氏 (学会スーパーバイザー) | 教育会館 中会議室 | 発表者を募集します。原稿形式自由。プレゼン可 事務局にメールかFAXで申し込んでください。 |
| 11月26日(土) 13:30~16:00 | 【第13回 とちぎ教育相談カフェ】 「職業検査を用いた面接相談」 馬場友治 氏 | 教育会館 小会議室 | 事務局にメールかFAXで申し込んでください。 参加費1,000円を当日徴収いたします。 |
| 令和5年 2月4日(土) 13:30~16:00 | 【精神医学特別講座】 演題「ネット・デジタル社会と共存 するために」 講師：本間真二郎 氏 (那須烏山市 七合診療所) | 教育会館 大ホール | 参加費無料 |
| 2月25日(土) 10:00~16:00 | 【冬季特別研修会】 演題「子ども達のゲーム・SNSの世界」 講師：橋本屋 | 教育会館 小ホール | 参加費 会員：2,000円 一般：3,000円 ※ 詳細については別紙参照 |

日本学校教育相談学会栃木県支部

〒320-0066 宇都宮市駒生1-1-6 教育会館栃木県連合教育会相談部内
日本学校教育相談学会栃木県支部 理事長 柴一彌 事務局 吉川修司・佐藤佳子
TEL 028-627-5682 FAX 028-627-5682
E-Mail : jasc.tochigi@gmail.com
ホームページ : <http://t-soudan.sakura.ne.jp/index.html>
(会員の部屋パスワード tb-jascg3123)

発行責任者：柴一彌(理事長)

広報担当者：伊澤 裕・小川正人・佐藤幹雄・馬場友治・原沢大生未・平峰 孝二・松本直美